

透析施設最前線 Vol.3

HOSPYPグループ 十全クリニック



十全クリニック

所在地 : 名古屋市瑞穂区茨木町88

透析台数 : 65台

看護師数 : 19名

患者数 : 173名



立松宣子看護師長



村上裕香看護師



田原アイコ看護師

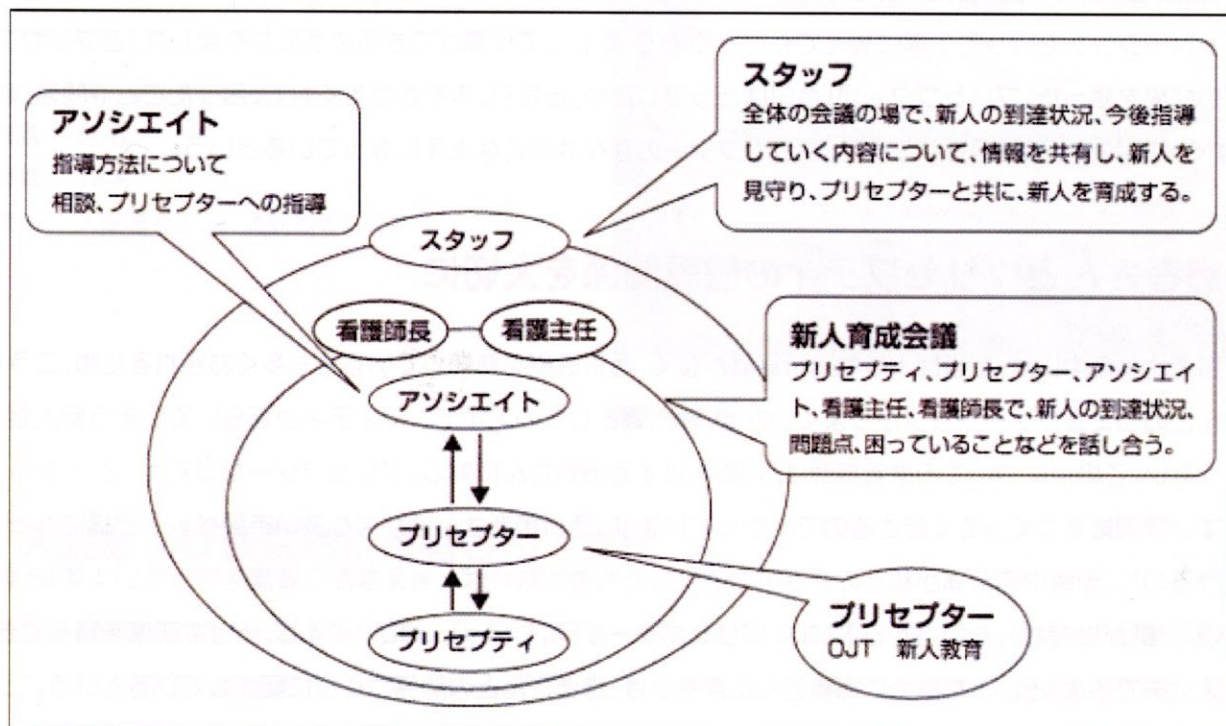
■ 十全クリニックの HOSPYP グループ内での位置づけ

十全クリニックは、新生会第一病院に隣接する透析専門施設で、同病院の機能を補完する役割を担っている。現在、約40名の職員が勤務し、月・水・金と火・木・土の2グループ体制で通院透析を実施しており、医師の判断で入院が必要とされた場合には、HOSPYPグループ内の施設(新生会第一病院、名古屋記念病院など)または最寄りの入院可能な透析施設を紹介している。

■ プリセプターシップの体制づくり

十全クリニックでは、入職した新人看護師に透析医療についての教育を行うにあたり、プリセプターシップを導入し、先輩看護師(プリセプター)が新人看護師(プリセプティ)と固定ペアを組み、マンツーマンで1年間の指導を行う体制をとっている。また、指導に関する不安や悩みなどを相談できるアソシエイト役を設け、プリセプターを支援している。

また、このプリセプターシップは、アソシエイト、看護師長、看護主任などを含めた看護スタッフ全員が、新人看護師の育成に関わる仕組みになっており、月に一度は、プリセプティ、プリセプター、アソシエイト、主任、師長が集まって新人育成会議を開き、進捗状況や問題になっている点などについて話し合い、その内容を全体会議の場で、スタッフ全員に報告しているという。立松看護師長は、「月に2回ある全体会議で進捗状況を報告することで、プリセプター以外のスタッフもプリセプティに積極的に声をかけるようになりました。スタッフ全員で新人看護師を支えていくことを第一の目標として体制づくりを行っています」と語った。

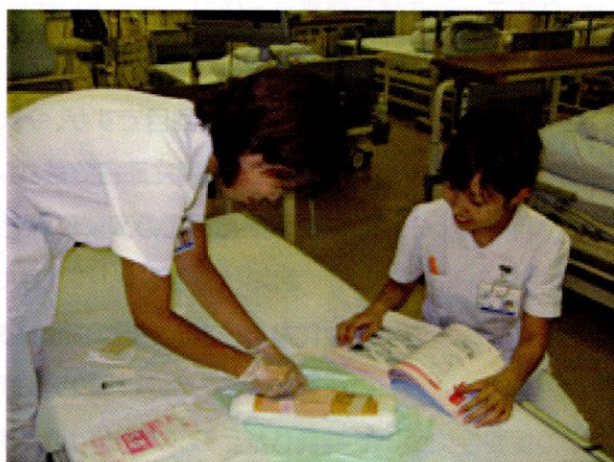


図：プリセプターシップの仕組み(スタッフ全員で支えるプリセプターシップ)

■ プリセプティに対する指導のポイント

透析看護では、安全で確実な透析技術とリスク意識を身につけ、透析患者を理解するコミュニケーションスキルを高めることが重要である。新人看護師への指導にあたってはこうした点にも留意し、どの新人に対しても標準的な指導が実践できるように、新生会看護部では『透析新人スタッフ・プリセプティ指導術』という指導書を作成した。指導書を使用することで、プリセプターは指導書に基づいて安心して指導ができ、プリセプティも統一された内容の指導を受けることができる。

また、十全クリニックに入職する新人看護師は、必ずしも新卒というわけではなく、既卒で透析以外の長い看護経験を持つことも多い。そのため、透析の専門知識や技術を指導する際には、これまでの経験やスキルへの配慮が必要となる。現在、プリセプターを務めている村上看護師に、プリセプティの田原看護師に対する指導について伺った。村上看護師は、「私は新卒で入職して今年で5年目なのですが、田原さんは透析看護は初めてでも、看護師としての経験年数は10年



写真：新人看護師への指導

と私よりも長いですから、田原さんのこれまで経験やスキルを尊重しながら、透析看護について指導しています」と語り、プリセプティが有する知識を把握するとともに、指導内容への理解度を常に確認し、知識の詰め込みではなく、一つひとつの手順に意味があることを説明しながら指導を進めることが重要だと指摘した。「プリセプティが根拠に基づいて自信を持って行動できることが目標です。言葉や教材だけで教えるのではなく、実際にデモンストレーションやイメージトレーニングなどを交えて指導しています」と村上看護師は指導のポイントを語った。

一方、田原看護師は「透析看護は初めてだったので、最初はかなり不安が大きかったのですが、教材はもちろん、デモンストレーションを行って丁寧に教えてくださるので、安心して仕事ができるようになりました」とプリセプターシップの成果を語った。プリセプターが「今日はどうでしたか」と毎日、声をかけてくれて、困ったことや問題点があれば、すぐにアドバイスが得られるので、プリセプターの存在は大きな支えになっているという。

■ 患者さんとプリセプティの信頼関係を大切に

透析患者さんの中には、看護師よりも透析経験が長く、透析医療を熟知している方も多くおられるため、こうした患者さんとのコミュニケーションがうまくいかず、専門職としてのアイデンティティが揺らいでしまう新人看護師も少なくない。この点について田原看護師は「初めて接する患者さんに対し、プリセプターがコミュニケーションをとりやすい雰囲気をつくってくださるので助かっています。透析患者さんはかなり長い時間ベッドで横になって治療を受けるので、治療中の苦痛が私との会話の中で少しでも癒されればと考えながら看護を行っています」と語った。新人看護師が患者さんを担当する際には、プリセプターが「私もいっしょにいますし、十分な研修を積んできましたから大丈夫ですよ」といった具合に患者さんに声をかけ、患者さんとの関係づくりに配慮しているという。

また、技術面で間違いなどがあればすぐに交代できるように見守り、患者さんのいないところで誤りを訂正している。間違いに気がついた際、患者さんの前では注意せず、プリセプティの名前を呼んで処置を止めるだけに留めるのは、患者さんとプリセプティの信頼関係を崩さないために重要な点だという。

■ プリセプティへの指導を通じてプリセプターも大きく成長

プリセプターシップの導入前は、透析看護という特殊な業務に対する不安などから入職してもすぐに退職してしまうケースも少なくなかったが、導入後はほとんどの新人が勤務を継続するようになり、離職率は低下した。

また、プリセプターシップは新人のみならず、プリセプター役の看護師の成長にも寄与している。村上看護師は「プリセプター役を務めるのは今年で2回目ですが、今まで気づいていなかったことを、プリセプティに聞かれて初めて考えることも多いです。質問に即答できない場合には自分でも勉強しますから、自身の成長にもつながったと思います」と、プリセプターにとってのメリットを述べた。

最後に立松看護師長は「プリセプティとプリセプターがともに成長するためには、知識やスキルの伝達に留まらず、育ち・育て合うという認識を持つようになっていくことが大切です」と、プリセプターシップの根幹にある意識変革の重要性について指摘した。